越後太平記（下）

綱淵謙錠

中公文庫

中公文庫
越後太平記（下）
昭和五十八年十二月十日初版
昭和六十三年一月十五日四版
著者　綱淵謙錠
発行者　嶋中鵬二
整版印刷　三晃印刷
カバー　トーブロ
用紙　本州製紙
製本　小泉製本
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201081-0
©1983

庫

越後太平記

下　巻

綱淵謙錠著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

下卷 目次

乳癌 9
愛妾 18
山屋敷 28
尾鰭 38
烏蛇 47
珊瑚珠 57
麦倉 68
下乗橋 78
隠居願 87
血判 97
不時登城 106

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

美作退隠 116
雪折れ 126
見舞状 136
光長参府 146
地雷火 156
大蔵召喚 166
追放 175
長誓紙 185
異臭 195
舟逍遙 205
厳有院殿 214
懐妊 223
籠抜け 232
遺言状 242

限定相続 251
失脚 261
落涙 270
虚勢 281
握り潰し 290
親裁 300
判決 309
清響 318
余韻 328
解説 澤田ふじ子 339

越後太平記

下巻

乳癌

寛文九年、保科正之が将軍補佐役を退いたあと、ひとり家光の〈託孤の遺命〉を守って幕閣に残っていたのは阿部忠秋である。

寛文二年三月、松平信綱が死んだとき、忠秋はその病床を見舞って、「あなたは天下になくてはならぬお人です。わたしは違う。できることならあなたの身代りになって死にたい」といい、二人で泣いた。それぞれの性格に違いはあったが、老中同期生（寛永十二年）として家光以来肩を並べて幕政に励んできたのは、この二人であった。信綱の死は忠秋にとっては自分の半身を取られるようなつらさであった。

忠秋には戦国の三河武士を思わせる一徹さがあった。しかしそれが、酒井忠清や稲葉正則・久世広之といった後進の老中たちからは、頑固さとしかみられないようになっていた。時代が変ったのである。

寛文三年五月、新しい「武家諸法度」を公布したとき、保科正之たちは〈殉死の禁〉や〈不孝者の処罰〉などをこの法度に加えることを主張したが、忠秋はこれに反対し、結局それは法度には加えられずに〈別紙〉をもって申し渡された。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

また幕府をはじめ各藩で深刻化しつつある財政難の切抜け策として、酒井忠清や稲葉正則たちは各大名家の家中の人馬を削減することを考えた。ところが忠秋はこれにも断乎反対し、かえって自分の藩（武州忍藩・八万石）では二百石以上の者に馬を持てと命じた。

それはどう考えても時代錯誤としか思われなかった。世の中が戦時体制から平和体制に変り、儒教道徳が政治の根本思想として滲透しつつあることや、迫り来る財政難を救うために人員整理が要求されている時代の流れを、忠秋は認めようとはしなかった。酒井忠清ら新進の老中たちにしてみれば、家光・家綱二代にわたる長老にたいして敬意を払うのにやぶさかではないが、忠秋の存在によって現実に政治がやりにくくなってきたのである。

寛文五年（一六六五）八月五日、忠秋は将軍家綱に御座の間に呼ばれ、月番の勤務と評定所への出仕はもうしなくてもよろしい、と申し渡された。

家綱は忠秋が先代家光の若年のころから忠勤を励み、老中に抜擢され、家光の死後は自分の傅として長年よく献身補佐してくれたことに感謝したのち、「そなたも疲れたであろうから、もうそろそろゆっくり休息をとるようにせよ。したがって月番と評定所への出仕はしなくともよろしい。そしてこれからも他の老中たちと相談して、予の政道を見守ってほしい」と告げた。

忠秋の頬に数行の涙がしたたった。忠秋はことばにつまって返事ができなかった。しかし、それは感謝の涙ではなかった。

忠秋に与えられたのは、いたわりに包んだ家綱の退任勧告であった。忠秋がただ一人の前代の遺老として、もはや後進の老中たちと調和できなくなったことを、家綱が他の老中たちに代って

宣告しているのである。

気を取り直した忠秋は家綱の仰せを拝承して御前を退ったが、辞職願は出さなかった。

寛文六年（一六六六）三月、酒井忠清が大老に就任すると同時に、阿部忠秋は老中を解任された。しかし忠秋は隠居せず、元老として幕閣に残っていた。おそらく忠秋は、まだ自分の存在が徳川家にとって有用である、という使命感に燃えていたのであろう。それは老いの一徹というに近かった。

老中をやめたのちの忠秋に、次のような逸話がある。――

寛文八年の大火のとき、火は江戸城の大奥にも飛火して、将軍夫人が西ノ丸に避難する騒ぎとなった。

家綱の正室は伏見宮貞清親王の姫君で浅宮（あさのみや）顕子女王といい、明暦三年の大火の年に江戸へ下向して家綱と結婚した。

この将軍夫人は生れつきねずみが大嫌いで、天井で少しでもねずみの物音がすると、顔色をかえて怖がったので、江戸城でも夫人の居間や寝所では天井に萩をたくさん積み入れて、ねずみが騒がぬようにしていた。

ところがこの火事でその萩に火気が移り、焦臭いにおいがあたりに立ちこめたので、人々はあわてさわいで、将軍夫人を西ノ丸へ避難させているところへ、阿部忠秋が家臣どもを引きつれて駈けつけた。

なんといっても男子禁制の奥向きの、しかも寝所ということなので、防火の設備がない。天井へ上がろうにも梯子一つないのである。そこで忠秋は家臣どもに命じて、女中部屋の縁を二、三間ずつ打ち放させ、これを打ち返して天井へ懸けさせた。

この俄か梯子を大工の棟梁の木原木工允が真ッ先に昇って行った。そして天井板を押し上げると、黒い煙が斜めに渦巻き、天井一帯に立ちこめた。棟梁が眼をふさいで、「早く上がれ」と下にいる者たちを招くと、徒士組の者が数人、手桶がないので、貝合わせの貝を入れておく貝桶とか湯桶、その他、その辺に有り合う手箱、櫛箱のたぐいまでに水を入れて、次々と梯子をつたって天井に運んだ。

そこで棟梁は大工どもに下知して、一方の破風を打ち破らせ、そこから煙を洩らして、跡に水を懸けたので、火気も去り、御殿は焼けずに残った。ここは御台所の御座の間なので、賤しい下男どもには消火にあたらせなかったのである。

さて、火事騒ぎが終ってから、このときの働きにたいして褒美が出たのであるが、最初天井に上がって行った御徒士のなかにも、天井へ上がるときに頭の名と自分の名を名乗った者は証拠があるので禄をいただいたが、名乗りもせず、あわてて先を急いで上がった者は、証拠がないので無駄働きとなった。

この火事のとき、忠秋は六十七歳であった。五十八歳の保科正之が失明の危険もいとわずに登城したように、江戸城が危ないというと、老骨に鞭うち、命もかえりみずにみずから駈けつけるのが、かれらの生甲斐だった。

寛文十一年（一六七一）五月、七十歳の忠秋はようやく隠居した。いや、隠居させられた、といったほうが正確であろう。

阿部忠秋という人はたいへん慈悲深く、とくに子供を可愛がったという。

城から退出して藩邸に帰ると、家中の子供たちの五、六歳から十四、五歳までを順々に呼び出して、庭で好き勝手に遊ばせ、その遊びに余念のないさまを見るのを慰めとした。

また、上野の寛永寺や芝の増上寺に将軍の代拝におもむくときは、いつも朝早く出かけ、途中に捨子があると、さっそく拾わせて屋敷へ届けさせ、乳母をつけて養育するようにしたので、その日の暮らしのできぬ者は、豊後守さまが通るというと、わざと子を捨てて、忠秋に拾ってもらうようになった。

「いくらお慈悲とは申せ、江戸中の子供を拾うわけにもいきませんし、よこしまな親にだまされるのも残念です。また親が行方不明の子供を養うのも無駄な出費というものです」

と、家臣どもが諫めると、忠秋は笑って、

「皆の者、よく聞け。そもそも親子ほど恩愛の深い者はないはずだから、ことに乳呑み子を、そうたやすくは捨てられるものではあるまい。とても養育できないから捨てるのだ。その親の心になってみよ、どんなに悲しいことか。これを拾って養い、やがてその子の働きに応じて召使うときは、軽輩のなかにも譜代の者が多くなるわけで、無駄な出費とはいえない。これを養育して家中の迷惑となるならわしの誤りだが、家臣たちを扶持した余慶でこうするのだから、他の遊興に

金を費すのとどちらが無駄か。そのうえ、わしのように天下の政務に口出しする役柄にある者は、まず天下のことを考えるべきで、将軍家のお膝元に捨子のあるのは天下の恥。その恥を隠すのも老臣の仕事ではないか」

と答えたので、家臣どもは頭を下げるしかなかった。したがって毎年数十人の捨子が忠秋の屋敷で養育され、のちにはそれぞれりっぱな奉公人となったので、男ならその仕事ぶりによって士分に取り立て、女は出入りの町人や足軽などでほしいという者に嫁がせた。

寛文十一年五月二十五日、大老酒井忠清が老中らとともに忠秋の屋敷を訪れ、将軍の仰せといって「忠秋近来老病と聞く。前代からの旧功を思い、とくに隠居を差し許すゆえ、心ながく養生せよ」と伝えた。むりやりの退隠命令である。忠秋は即日髪を切り、家督を養子の正能（まさよし）に譲った。

天下は完全に〈下馬将軍〉酒井忠清の掌握下に入った。当時、老中には稲葉正則・久世広之・板倉重矩・土屋数直の四人がいた。このうち板倉重矩以外は忠清に追随する人間だったといわれる。

忠秋の最期を飾るエピソードがある。隠居した翌年の寛文十二年十一月、忠秋は忠清・正則・広之・数直を自宅に招いて、諸大名・旗本が大老や老中の接待費に多大の費用をかける結果、大火（寛文八年）後困窮している財政がいっそう苦境に追いつめられている事実を取り上げ、「あなた方が奢りの振舞いを改めないというなら、この場で刺し違えて死にましょう」と語気鋭く迫った、という。

忠秋はそれから三年後の延宝三年（一六七五）五月三日、七十四歳で死んだ。

延宝三年（一六七五）五月の阿部忠秋の死をもって、家綱が家光から将軍職を継いだときに頼みとした重臣たちはみな死んだことになる。その他に親類としては、水戸の徳川頼房は寛文元年七月に、紀伊の徳川頼宣も寛文十一年一月に死んでいた。

延宝三年は家綱三十五歳。病弱な家綱としては、そろそろ人生の孤独も理解できるころである。家綱が越後中将の松平光長をひときわ懐しく思うのも血縁というものであろう。光長はこの年、六十一歳の還暦であった。

家綱の日常を何よりも淋しくしているのは、子供がいないということであった。

前述したように、家綱の御台所顕子は伏見宮貞清親王の姫宮であるが、このような結婚は政略的な意味合いのものが多く、それに御台所のほうが家綱より一つ（二つともいう）年上だったせいもあってか、夫婦の仲はあまりしっくりしていなかったといわれる。

それに、家綱夫人はなかなか気丈な女性だったようである。「武野燭談」に、次のような逸話を載せている。――

寛文の中頃のこと、どう迷ったのか葛西（武蔵国葛飾郡）の百姓が一人、大奥の御台所の寝所まで入ってくるという珍事があった。（おそらく江戸城に野菜を届けて、帰りに城内の肥を汲み取って行く百姓であろう。）その百姓が几帳を掲げて、御台所の寝所をのぞいたのである。二人の目と目が会った。ふつうの女性なら悲鳴をあげるところであろうが、御台所は少しもあわてず、男が逃げ去ると侍女を呼んで、「いま、わたしの枕元をのぞいた者がいます。捕えよ」と命じた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com